

新年のお慶びをもうしあげます



ひつじ年にあたり、羊飼いに日々忠実についていく羊であることを願いながら新しい年を始めました。「福島デスク」が福島市に移転してから迎えた新たな年です。あの震災、福島第一原発事故から4度目のお正月を仮設住宅で迎えられた方々、新しい道に一步踏み出された方々、それぞれの思いで迎えられたことと思います。4年目になっても先行き不安な中での新年は、本当に辛いものだと思われれます。今年こそ、一人一人に希望が見える年となることを願っています。

風評払拭への努力

「福島産」との表示があるだけで、購買を敬遠する人がまだまだいるという話を耳にする。何をかうかは消費者の選択ではあるが、正しい情報を基にして選択をしてもらいたいと感じているこの頃である。風評払拭に福島県の高校生は大活躍している記事が毎日のように報道されている。高校生は自らの故郷を愛し、誇れるものにしたいという思いから、「福島産」に対しての風評被害をどのようにして軽減していけばよいのか模索し、アピールの方法、「福島産」の食材を使って若者の感覚での新商品を考案している。郷土福島を大事にしている若者に心が惹かれる。

2015年4月から6月は「福島デスティネーションキャンペーン」が行われる。この機会を福島の風評被害を払拭するための機会となるように、福島県内では本当に筆舌に尽くしがたい努力がなされている。「放射線は大丈夫か」と聞かれるなら、現状を伝えることしかできないし、自分から「大丈夫」だとは言えないが、現状を伝え、正しい情報を提供することによって選択してもらうよう魅力ある牧場づくりをと日夜努めているのが130年の歴史を誇る鏡石町の「岩瀬ファーム」の社長伊藤さんだ。

消費者も食品に対する正しい知識、認識をもって、どういう消費者に自分になりたいのか、消費者として成長して欲しいと思う。

“ガレキ”撤去

浪江町の“ガレキ”撤去作業は随分と進んでいる様子である。東日本大震災、福島第一原発事故からまったく手が付けられていなかった富岡町、双葉町の“災害ガレキ”撤去が、富岡町で1月11日から、双葉町では17日から始まる。そういえば先月、富岡駅に行ったときには写真を撮りながら状況を把握している作業服姿の男性が何人か見えていた。撤去作業の準備なのかなという思いがすぐに頭をよぎった。2014年12月6日には浪江—南相馬、相馬—山元の常磐自動車道の開通をみた。浪江IC以北の開通により相双地方から仙台市まで直結したことにより、住民から浜通りの復興加速化が期待されている。常磐道は未開通区間の常磐富岡—浪江IC間（同14・3キロ）が2016年3月1日に開通し、三郷（埼玉県）—亘理（宮城県亘理町）IC間（同約300キロ）全線で開通する予定だ。急ピッチでの整備が始まった。市民の安全、安心を確保しながらの作業を望む。常磐道が開通すれば、関東からのアクセスが非常に便利になる。

増え続ける「関連死」

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から3年10ヵ月、それだけの年月が経たにも関わらず、自宅に帰ることが出来ず、生活の安全、安心が得られないために23万6千人もの人がまだ、さまざまな形での避難生活を強いられているのが現実である。そんな最中に行われた「衆議院解散」「衆議院総選挙」原発に関する争点がぼかされ、浮き彫りになることはなかった。

そんな中、人々の健康維持は難しく、長引く避難生活の中で健康が損なわれ、体調悪化をきたして「震災関連死」を迎える人が後を絶たない。被災地3県では3,000人を超えている。12月12日の「河北新報」によると、福島県内での震災関連死は11月末時点で1,817人、震災直接死1,603人を上回り続けている。避難生活の限界はすでに来てしまっている。とても心が痛む状況が福島には続いている。しかし、いったん福島を出ると空気は変わるように感じるのを感じ過ぎだろうか。※復興庁は震災関連死の死者について「東日本大震災による負傷の悪化などにより死亡し、災害弔慰金の支給等に関する法律に基づき、当該災害弔慰金の支給対象となった者」と定義している。

小学生が思いを劇に

双葉北、双葉南小学校の児童たちは、東京電力福島第一原発事故で全域が避難区域になっている双葉町の子どもたちである。避難が続くいわき市の仮校舎で2つの学校と一緒に授業をしている。その児童たちがオリジナルの劇を披露した。2つの小学校は一年生が二人、五年生が一人、六年生が二人の五人で、仮設に住む町民に話を聴いて新聞にまとめ、それを基にして六年生が先生と一緒に劇を作ったものだ。福島第一原発事故後、短時間の一時帰宅は認められても15歳未満の子供の立ち入りは認められていないため、3年9ヵ月経った今も、児童たちは町にも自宅にも一度も戻っていない。「ずっと行ってない双葉町に行きたいな」との気持ちを劇で表現し、タイムトンネルで「過去」に自分たちが親しんでいた町での思い出を繰り広げ、十年後の未来の町を訪ね、「何も変わってなくてつまらない」「でも故郷が変わらないということはいいことだ」と結ばれた劇に、雑草が伸び放題、動物に荒らされ放題の家を知っている大人たち、仮設住宅から集まった大人たちは声を詰まらせ、涙をぬぐった。「帰れぬ町への思いを劇に」との小さな新聞記事が心を締め付けた。

司教のための社会問題研修会

日本カトリック社会司教委員会の2014年の社会問題研修会は、福島の現地学習として12月16日から18日の2泊3日で行われた。11人の司教たち、司祭修道者信徒合わせて22名の参加者が福島に集い、福島第一原発事故から3年9ヵ月の現状、現実、人々の生活、現場を見聞きた。司教様方が福島に足を運んでくださることによって、「場」も多くの事を語ったと信じている。多忙の日々の中で、時間を作って福島に来てくださったことに心から感謝しているし、これが日本の教会のこれからの歩みに生かされることを期待している。

先日、アメリカとカナダから「福島デスクニュース」に対してのお礼のメールが届きました。

このような拙いニュースレターではあっても、福島の声として聞き取り、支援と励ましのメールを送ってくださり共に歩んでくださる世界の皆様から心からの感謝を申し上げます。